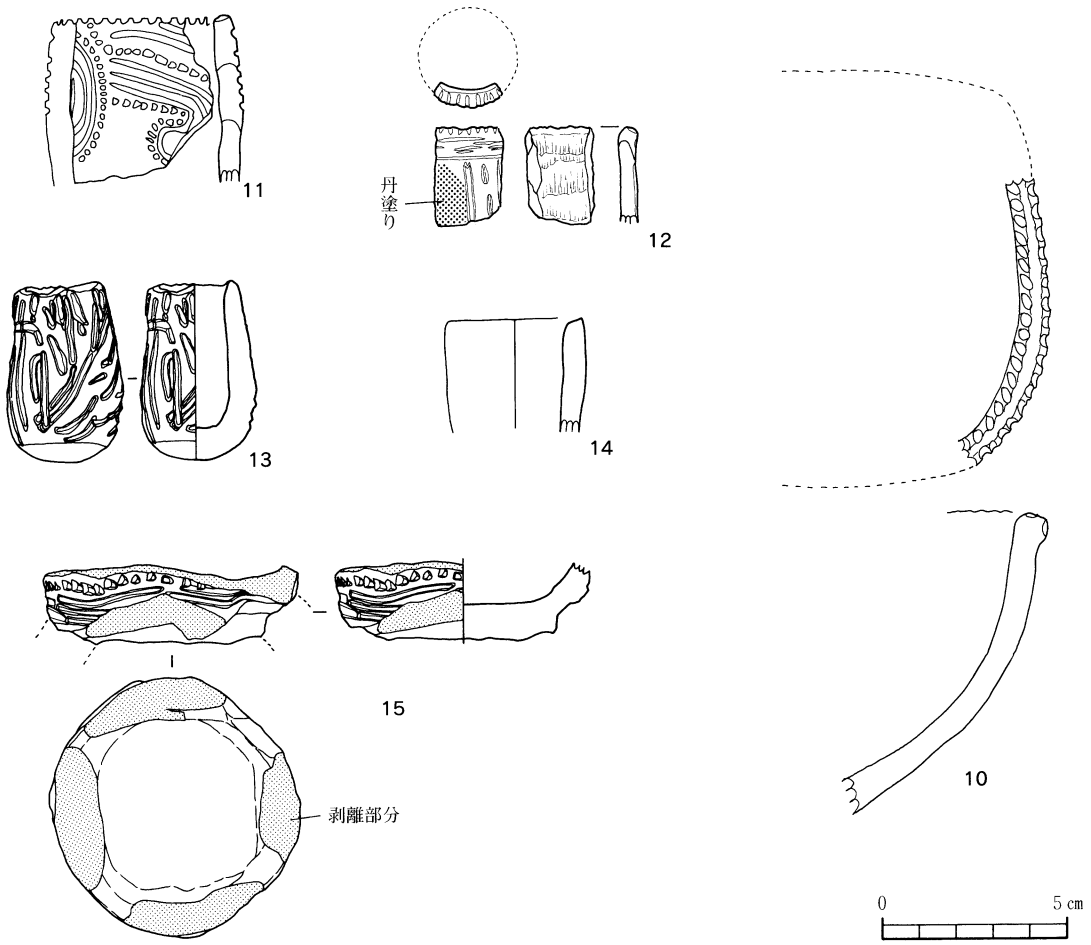


第252 図　特殊小型土器実測図 2

「平栫土器」について(第241図～第250図)

「平栫土器」に分類した土器は，第３群か，第４群か，第５群か，どの群に属する土器か分別ができなかった土器について，名付けた土器である。主に胴部や底部がこの類に属する。

1）深鉢形土器(第241図～第246図)

胴部や底部では器形的特徴も施文的特徴も，先述したようにほとんど差がない。特に第３群でも，第４群でも，第５群でも器形的特徴は，胴部上半か中央部かが最大径となり，底部に向かってすぼまる器形を呈する。底部は若干上げ底となっている。一方，第３・４・５群と同様に施文的特徴としては，胴部上端から胴部下端まで結節縄文を施す土器であること，結節縄文の撚りの種類は３種類あること，など判別は非常に困難である。

2）壺形土器（第247図40～第250図56)

40～42は，口縁形態が平口縁となる口縁部である。器形的特徴としては肥厚させないことが特徴である。わずかに外反するか，直行することが特徴である。施文的特徴としては口唇上端部に刻みを施すこと，口縁部には沈線文と刺突連点文とで曲線文や波状文で文様を構成することを挙げることができる。

43～51は，肩部から胴部にかけての資料である。器形的特徴としては胴部上半部に最大径があり，底部に向けてすぼまる器形となる。施文的特徴としては頸部文様帯は沈線文と刺突連点文とで文様を構成するが，肩部から胴部にかけては無文である。

なお，51のようにススが付着している土器もある。

52～56は胴部下半～底部にかけての資料である。器形的特徴としては底部にかけてすぼまった器形は，底部では若干上げ底の平底となる。特に53は底部から胴部にかけて開いて立ち上がる特徴がある。施文的特徴としては53が胴部下端まで結節縄文を施す土器である。その一方で52・54～56は無文であった。従ってこの時期に属する壺形土器は肩部から底部にかけては無文にするのが大部分の特徴であると言える。

⑥　第６群特殊小型土器

鉢形もしくは椀器の小型のものを特殊小型土器とした。１は，復元口縁径10.5㎝，器高９㎝を測る。
底部は平底。やや張った胴部から口縁部は大きく外反し，端部は垂れ下り気味である。器面全面に大型の土器と同様の沈線文と刺突連点文が施されるものである。２は，復元口縁径 7.6㎝，器高 4.5㎝を測るものである。器形は椀型で，わずかに肥厚した口縁部には刺突状の刻目が施される。３・４は，手づくね状の椀で無文。３は口縁部が楕円形を呈し，復元口縁径８×９㎝，器高 5.3㎝を測るものである。４は，口縁径 3.3㎝，器高 3.3㎝を測るものである。
器壁が厚く指頭による調整痕がわずかに認められるもので古墳時代の手捏土器に類似している。５は，復元口縁径10.4㎝を測る。口縁部はやや内弯し端部はすぼまるものである。６は，復元口縁径12.8㎝，器高 4.4㎝を測る。平底の底部から大きく外反するもので，須恵器の坏を思わせるような器形である。７は，丸底から丸味を帯びて立ち上がる。８・９は深鉢のミニチュアと思われるものである。８は胴部最大径が７㎝を測る。尖底に近い底部から胴部は稜を有する。９は口縁部が肥厚し山形をなす。10は，破片のため全体の形状はあきらかではないが，口縁部は方形になるのではないかと想定される。11は，復元口縁径 4.8㎝を測る。器形は筒状を呈し，口縁部はわずかに内弯する。口縁部には刻目が施され，外面には沈線文と刺突連点文が施される。12は，口縁径 2.2㎝，器高 4.8㎝を測るもので筒状を呈する。
器面全面に規則性の無い沈線文が施されている。器壁がやや厚いため内面径は 1.7㎝と小さい。13は，復元口縁径 2.7㎝を測るもので筒状を呈し，外面に沈線文と刺突文を施す。また，一部に赤色顔料が塗布されている。14は，復元口縁径 3.8㎝を測る。11～13と同様に筒状を呈するが無文である。15は，特殊な土器である。全体の形状は不明であるが底部付近と思われる。外面には沈線文と刺突文が施される。底面には脚か，透かしがあったと思われる脚のはずれた痕跡が４箇所認められる。

⑦　小結

上野原第10地点の発掘調査では，縄文時代早期に属する土器は，層位的には把握できなかった。従って，特に土器型式内の差が時間差を示す事柄なのか，種類の豊富さを示す事柄なのか，層位的には明らかにできなかった。
しかしながら先に述べたように，各型式間には器形的特徴にも施文的特徴にも共通点と異質点とが観察できた。このことから，これまで分類した土器型式内の差が時間差を示すと仮定して，型式組列を考えることにする。

⑦－１　深鉢形土器について

１）第１群・第２群について

南九州縄文早期土器編年において，手向山式土器より新しく位置づけられ，平栫式土器より古く位置づけられている，第１群(妙見式土器)と第２群(狭義の天道ヶ尾式土器)に属する土器について若干の考察を記す。
まず，第１群深鉢形土器の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると，次のように２タイプに分類できた。
Ａは口唇部を丸く収め，口縁部は肥厚せずそのまま外反する土器(器形的特徴３)である。口縁形態には，波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部はあまり張らずに底部へ移行する。土器の大きさは超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器・小型土器の６種類ある。
Ｂは口唇外面に小さな三角形状の突帯を巡らす土器(器形的特徴４)。口縁形態には，波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部形態はＡと同様。土器の大きさは超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器の５種類ある。
そして，Ａに属する土器が数多くあり，Ｂに属する土器は数少ない傾向にある。
さて次に，第１群の施文具の種類と文様帯との関係についてＡとＢとに共通する基本的特徴は，まず，口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては，刻目突帯を巡らす(施文的特徴ｃ)こと。つぎに頸部文様帯から胴部文様帯では，波頂部下に瘤状突起と貼付突帯を施す(施文的特徴ｅ)こと。胴部文様帯には単節斜行縄文を施すか，もしくは単節斜行縄文を地紋として沈線文と刺突連点文とで文様を構成すること(施文的特徴ａ)である。さて沈線文を施す場合の棒状工具は先端部を尖らし，沈線文の打ち込みや止めを流して施文する(施文的特徴ｈ)特徴がある。
つぎに第２群深鉢形土器の器形的特徴と本報告の土器

分類とを比較すると，次のように２タイプに分類できた。

Ｃは口唇部を丸く収め，口縁部が肥厚せずそのまま外反する土器(器形的特徴３)である。口縁形態には，ごく浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が張りながら底部に移行する。

Ｄは口唇外面に小さな三角形状の突帯を巡らす土器(器形的特徴４)である。口縁形態には，ごく浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が張りながら底部に移行する。土器の大きさには，大型土器・中型１・２・３類土器・小型土器の５種類ある。

そして，Ｃに属する土器が数少なく，Ｄに属する土器は数多い傾向にあるといえる。

さて次に，第２群の施文具の種類と文様帯との関係について基本形として，まず，口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては，刻目突帯を施さず，沈線文と刺突連点文とで文様を構成し，横位方向に巡らす(施文的特徴ｄ)。つぎに頸部文様帯から胴部文様帯では，波頂部(想定部)直下に瘤状突起と縦位方向の突帯とを貼付する(施文的特徴ｅ)。胴部文様帯に単節斜行縄文を施すか，もしくは単節斜行縄文を地紋として沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器(施文的特徴ａ)である。さて沈線文を施す場合の棒状工具は先端部を尖らし，沈線文の打ち込みや止めを流して施文する(施文的特徴ｈ)特徴がある。

ここで第１群の特徴と第２群の特徴とを総括すると，

第１群：Ａ器形的特徴３(２，１)＋施文的特徴ａｈｅｃ
　　Ｂ器形的特徴４(２，１)＋施文的特徴ａｈｅｃ
第２群：Ｄ器形的特徴４(２，１)＋施文的特徴ａｈｅｄ
　　Ｃ器形的特徴３(２，１)＋施文的特徴ａｈｅｄ

となる。さて，南九州縄文早期土器編年から，「妙見・天道ヶ尾式土器→平栫式土器」という編年観を基本とすると，施文的特徴としては「ｃ→ｄ」(刻目突帯の消失＝沈線文化)という変遷が考えられる。上記の様相から，第１群と第２群に共通する「妙見・天道ヶ尾式土器様式」の特徴として，施文的特徴ａ・ｅ・ｈを挙げることができる。

その一方で，第１群および第２群の変遷については，

(Ａ・Ｂ：３＞４，ｃ)→(Ｃ・Ｄ：３＜４，ｄ)

という型式組列を考えることができる。

２）第３群・第５群について

南九州縄文早期土器編年において，妙見・天道ヶ尾式土器より新しく位置づけられ，塞ノ神Ａａ式土器より古く位置づけられている，第３群と第４群と第５群(平栫式土器)に属する土器について若干の考察を記す。

まず，第３群深鉢形土器の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると，次のように２タイプに分類できた。

Ｅは口縁部に小さな三角形状の突帯が口唇下に巡る土器(器形的特徴４)である。口縁形態には，浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が若干張りながら底部に移行する。土器の大きさには，超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器・小型土器・特殊小型土器の７種類ある。

Ｆは口縁部を三角形状に肥厚させる土器(器形的特徴5.1)である。口縁形態には，浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が若干張りながら底部に移行する。土器の大きさには，超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器・小型土器・特殊小型土器の７種類ある。

さて次に，第３群の施文具の種類と文様帯との関係についてである。基本形として，まず，口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては，刻目突帯や貼付突帯を施さず，波頂部想定部に，口縁肥厚帯部下だけでなく頸部と胴部との境にも瘤状突起を貼付する(施文的特徴ｆ)。また口縁部文様帯には沈線文と刺突連点文とで文様を構成する(施文的特徴ｄ)。胴部文様帯には結節縄文を施す(施文的特徴ｂ)か，もしくは沈線文と刺突連点文とで文様を構成する。

さて，沈線文を施す場合は施文具の棒状工具は先端部を丸くして，しっかり施文する(施文的特徴ｉ)特徴がある。

つぎに第５群深鉢形土器の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると，次のように２タイプに分類できた。

Ｇは口縁部を三角形状に肥厚させる土器(器形的特徴5.1)である。口縁形態には，浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が若干張りながら底部に移行する。土器の大きさには，超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器の５種類ある。

Ｈは粘土を張り付けて，幅広の口縁部肥厚帯を作出する土器(器形的特徴5.2)である。口縁形態には，浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半

部が若干張りながら底部に移行する。土器の大きさには，超大型土器・大型土器・中型１・２・３類土器・小型土器の６種類ある。

Ｉは頸部にあたる部分を削ったり，口縁部文様帯と頸部文様帯との境に横位方向の刻目突帯を巡らしたりして，「見かけの肥厚帯」を作出する土器(器形的特徴5.3)である。口縁形態には，浅い波状口縁を呈する土器(器形的特徴２)と，平口縁を呈する土器(器形的特徴１)とがある。胴部は中央部あるいは上半部が若干張りながら底部に移行する。土器の大きさには，大型土器・中型１・２・３類土器の４種類ある。

さて次に，第５群の施文具の種類と文様帯との関係についてである。基本形として，まず，口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては，波頂部(想定部)の口縁肥厚帯部下や，頸部と胴部との境などのどの部位にも，瘤状突起も縦位方向の貼付突帯も施さない(施文的特徴ｇ)。また口縁部文様帯には沈線文と刺突連点文とで文様を構成する(施文的特徴ｄ)。一方，頸部文様帯には，刻目突帯を巡らす土器(施文的特徴ｃ)と，文様を施さない土器と，数条巡らした刻目突帯間に波状沈線文を施す土器とがある。胴部文様帯には結節縄文を施す(施文的特徴ｂ)。

さて，沈線文を施す場合は施文具の棒状工具は先端部を丸くし，しっかり施文する(施文的特徴ｉ)特徴がある。

ここで第３群の特徴と第５群の特徴とを総括すると，

第３群：Ｅ器形的特徴４(２，１)＋施文的特徴ｂｉｄｆ
　　Ｆ器形的特徴5-1(２，１)＋施文的特徴ｂｉｄｆ
第５群：Ｇ器形的特徴5-1(２，１)＋施文的特徴ｂｉｄｇ
　　Ｈ器形的特徴5-2(２，１)＋施文的特徴ｂｉｄｇ
　　Ｉ器形的特徴5-3(２，１)＋施文的特徴ｂｉｄｇ

となる。さて，南九州縄文早期土器編年から「妙見・天道ヶ尾式土器→平栫式土器→塞ノ神Ａａ式土器」という編年観を基本とし，さらに先に述べた第１・２群の様相とを併せて考えると，器形的特徴では「4→5.1→5.2→5.3」という変遷が，施文的特徴では「ｆ→ｇ」(瘤状突起の消失)という変遷が考えられる。したがって上記の様相から，第３群と第５群とに共通する施文的特徴ｂ・ｄ・ｉが，「平栫式土器様式」の特徴として挙げることができる。

その一方で，第３群および第５群の変遷については，

(Ｅ：４，ｆ)→(Ｆ：5.1，ｆ)→(Ｇ：5.1，ｇ)
　　→(Ｈ：5.2，ｇ)→(Ｉ：5.3，ｇ)

という型式組列を考えることができる。

⑦－２　壺形土器について

１）第１群・第２群について

第１群壺形土器は，頸部から口縁部にかけての器形的特徴から２タイプに分かれる。

Ｊは長頸壺の器形を呈する土器である。口縁部から頸部・肩部へと緩やかに移行する。施文的特徴としては，口縁部文様帯から頸部文様帯には刻目突帯を巡らし，口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて全面に単節斜行縄文を施す土器である。

Ｋは頸部から口縁部にかけて直線的に外反する器形を呈する土器である。頸部と肩部との境は強い屈曲を呈する特徴が挙げられる。施文的特徴では，口縁部文様帯から胴部文様帯にかけては地紋として単節斜行縄文を全面に施した後に，瘤状突起を貼付する土器もある。また口縁部外面直下に橋状把手を貼付するものもある。

第２群壺形土器も第１群壺形土器と同様に，口縁部の器形的特徴から２タイプに分かれる。

Ｌは口縁部が外反する器形を呈する土器である。口縁形態がごく緩やかな波状口縁を呈する土器と平口縁を呈する土器とがある。また頸部から肩部にかけて強く屈曲する土器と緩やかに移行する土器とがある。施文的特徴としては，口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて地紋として単節斜行縄文を全面に施した後に，頸部文様帯には縦位方向の沈線文と刺突連点文とで文様を構成する。

Ｍは長頸壺の器形を呈する土器である。口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器と，平口縁を呈する土器とがある。また頸部から肩部にかけて強く屈曲する土器と，なだらかに移行する土器とがある。施文的特徴としては，第１群壺形土器と同様に波頂部（想定部）下の口縁部や頸部に，瘤状突起や橋状把手を貼付し，さらに口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて貼付突帯を施す土器が多い。さらに，口縁部から頸部には刻目突帯を数条巡らす土器もある。胴部文様帯には第１群壺形土器と同様に，単節斜行縄文を施す土器が多いが，沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器もある。

２）第３群・第５群について

第３群壺形土器も第１群壺形土器や第２群壺形土器と同様に口縁部の器形的特徴から２タイプに分かれる。

Ｎは口縁部が外反する器形を呈する土器である。頸部は短く，頸部と肩部との境は緩やかに移行する特徴がある。施文的特徴としては，波頂部(想定部)の口縁肥厚帯部直下だけでなく，頸部と胴部との境にも瘤状突起を貼

付する。頸部文様帯(頸部から肩部)には縦位方向・横位方向や斜位方向に沈線文と刺突連点文とで文様を構成する。また胴部文様帯(肩部から胴部にかけて)は，全面にわたり文様を施さず無文である。

Oは長頸壺の器形を呈する土器である。口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器と，平口縁を呈する土器とがある。また頸部から肩部にかけて強く屈曲する土器と，なだらかに移行する土器とがある。施文的特徴としては瘤状突起や橋状把手を貼付する。以上の特徴は第２群壺形土器と同様の特徴である。

一方，胴部文様帯は全面にわたり無文である。

第５群壺形土器は，瘤状突起も縦位方向の貼付突帯も施さずに，口縁部が幅広く肥厚する壺形土器をいう。口縁部の器形的特徴から２タイプに分かれる。

Pは口縁部が外反する器形を呈する土器である。口縁形態には波状口縁を呈する土器と，平口縁を呈する土器とがある。施文的特徴として口縁肥厚帯部には沈線文と刺突連点文とで曲線文や波状文などの文様を構成する。

Qは長頸壺の器形を呈する土器である。この中には口縁部がそのまま直行する土器と，口縁部が外反する土器とがある。また口縁形態が波状口縁を呈する土器と，平口縁を呈する土器とがある。施文的特徴としては，口縁肥厚帯部には，沈線文と刺突連点文とで曲線文や波状文などの文様を構成する土器や，棒状工具を使用して羽状文を施す土器がある。また，頸部文様帯には沈線文と刺突連点文とを縦位方向や斜位方向に施文して文様を構成する土器や，横位方向に巡らす土器が認められた。

縄文早期後葉前半期に属する壺形土器について，

1）当該期を通して壺形土器には，口縁部が外反する器形を呈する土器と，長頸壺の器形を呈する土器とがある。

2）第２群と第３群に属する長頸壺の器形を呈する土器には，頸部から肩部にかけて強く屈曲する土器と，なだらかに移行する土器とがある。

それぞれの器形の差は，時間的な差を示しているというよりは，むしろ用途の違いによる器形の差を示していると思われる。

⑦－３　出土状況について

今回の報告に際して上野原遺跡第10地点で出土した，縄文早期の時期に該当する土器について，22型式(類での分類を含む，以下同じ)に分類して報告を行っている(早期中葉11型式－第４分冊，早期後葉前半５型式－第５分冊，早期後葉後半６型式－第６分冊)。その全ての型式について出土状況図を作成し，掲載した(各分冊参照)。

そこで問題となるのが，早期後葉前半期の土器諸型式の出土状況である。しかし当該期の土器は出土点数が膨大であったため，細別型式ごとの出土状況図には実測図を掲載した土器のみについて点を落とした。そのため細別型式段階の出土状況は，傾向的な把握にとどまる。

さて注目できるのは，まず細別型式ごとに主に出土する区域が変化することである。さらに，資料化した土器では深鉢形土器も壺形土器も含めて，数グリッド離れた地点で出土した土器片と数多く接合している。

この事実をどう解釈するかである。原因としては，

A）風雨や流水などの自然的拡散。

B）後日，土器廃棄などによる人工的拡散。

C）人為的に土器を拡散させた。

ことなどが考えられる。そのうちA）やB）の原因では，ほぼ同地点で出土している他型式の土器では拡散が見られず，非常に不自然である。

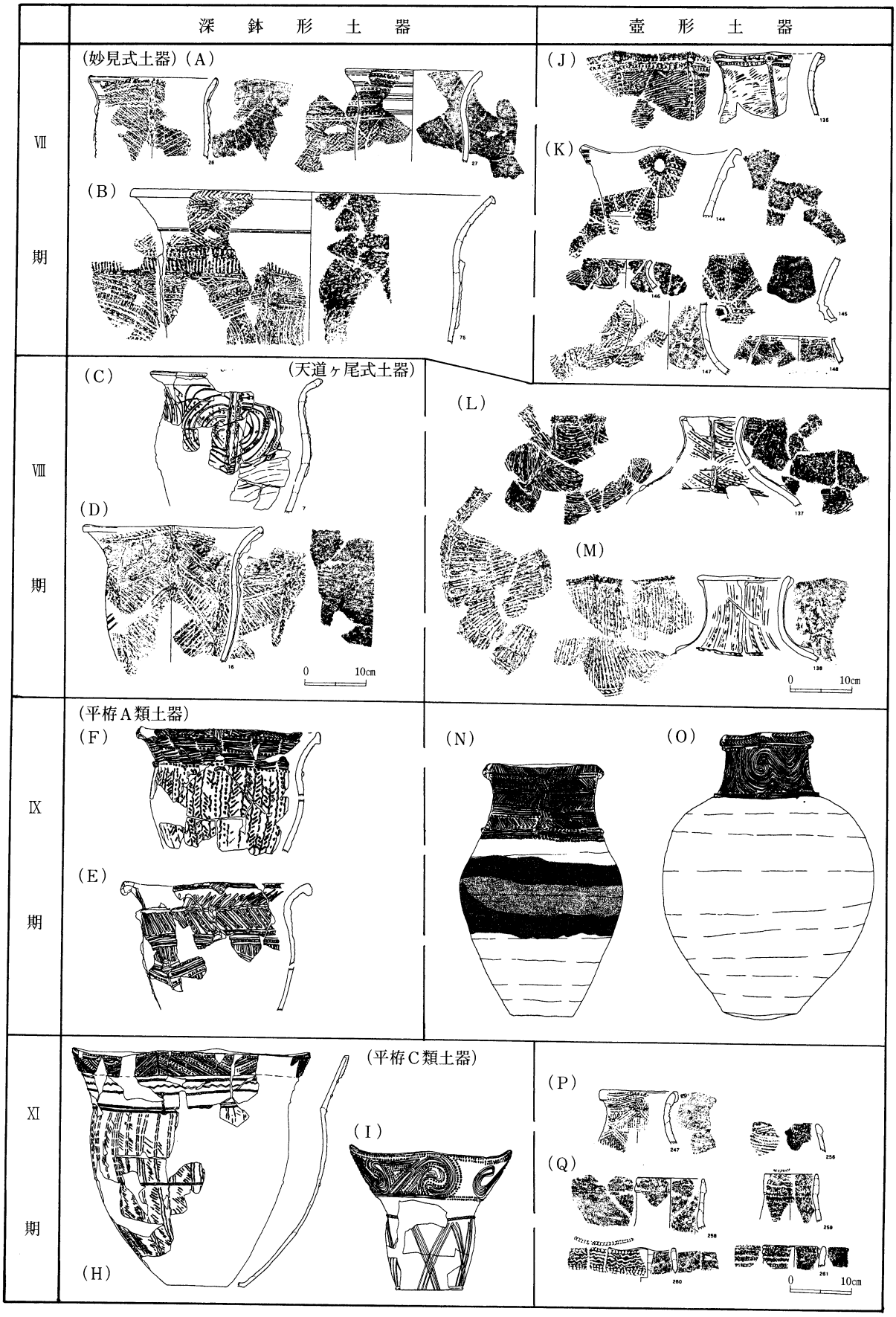
ところで本分冊に掲載した土器は，ある程度の大きさがある土器片を接合させたもので，かつ多くの土器は直径が推定復元できる程度の大きさにまで復元できた土器である。さらに土器片の割れ口が摩耗しているものは大変少なかったことが指摘できる。

ここで，C）の原因で考えられる行為の可能性の１つとして，「**ある程度の大きさがある土器片を，故意に落としていった。**」という行為(本書では**土器分置遺棄行為**と命名する)を，想定できよう。

特にこの区域は，土器埋納遺構が集中する土器出土希薄域のすぐ外側である，という立地を考えるならば，日常的な行為に限定した原因を考える必要はない。したがって，C）のような非日常的な行為をも原因とした，出土状況の結果と考える可能性は必要であろう。検証については今後の類例の増加を待って行う必要があろう。

さて，細別型式ごとに主に出土する区域が変化する状況も注目できる。即ち，第１・２群の時期には主に第２環状区域を中心に出土し，別に点々とブロック状に集中域が現れる傾向にある。また第３・４群では第１環状区域から外側の区域にかけて出土する傾向にある。一方，第５群の時期には第１環状区域を中心に出土している。

ただしいずれの時期でも，土器出土希薄区域を意識している状況が観察できること，第１環状区域の西側部にに土器出土減少区が直線的に拡がることが注目できる。



第253図　上野原遺跡第10地点縄文早期後葉前半期編年案（縮尺同一）

⑦－４　まとめ(第253図)

この小結では，第１群から第５群までに属する土器の器形的特徴や施文的特徴などを検討することで，型式組列を考え試案を提出することができた。

それをまとめたのが，上野原遺跡第10地点縄文早期後葉前半期土器編年案(第253図)である。

各時期を概観すると次のようになる。

【Ⅵ期】(手向山式土器期)

【Ⅶ期】

第１群(妙見式土器)を基準にする時期である。Ⅵ期(手向山式土器期)では見られなかった土器出土希薄域を形成している。それと同時に，Ｒ－９・10区に土器出土減少区も形成する時期である。

この時期，土器埋納遺構は検出されていないものの，土器出土状況から，後に形成されることになる土器出土希薄域という場の機能が，生まれ始めた時期と位置付けることができる。

なお，深鉢形土器も壺形土器も出土状況にはほとんど差が見られない。

【Ⅷ期】

第２群(狭義の天道ヶ尾式土器)を基準にする時期である。土器は主に第２環状区域を中心に出土する。

この時期に属する埋納土器は５個体出土し，埋納土器の土器型式の中では主体をなす時期の１つである。これらの土器は土器埋納遺構群中の南側に集中する。

したがって，埋納土器出土区と土器が主に出土した第２環状区域との間には，約40m以上の空白域がある。このことからも，土器出土希薄域や第２環状区域という場の機能を，Ⅶ期よりもさらに明瞭に強化し，形成した時期であるといえる。

一方，Ⅶ期でＲ－９・10区に不明瞭ながらも形成が確認できた土器出土減少区は，この時期にも不明瞭ではあるが確認できる。

なお，Ⅶ期と同様に深鉢形土器も一般の壺形土器も，出土状況にはほとんど差が見られない。

【Ⅸ期】

第３群(平栫Ａ類土器)を基準にする時期である。土器は主に第１環状区域からその外側にかけての区域を中心に出土する。

この時期に属する埋納土器は４個体出土し，埋納土器の土器型式の中ではⅧ期と共に主体をなす時期である。これらは土器埋納遺構群中の東端と西端に位置する。

ところで，Ｒ－９・10区南側に見られる土器出土減少区はこの時期に明瞭に形成している。

さて，この時期に深鉢形土器と一般の壺形土器とが出土する区画に若干の違いが見られる。その結果，Ⅷ期よりもⅨ期の方が，深鉢形土器よりも壺形土器の方が，土器出土希薄域を明瞭に形成する傾向があると，いえる。

このことからも土器出土希薄域や第１環状区域という場の機能を，Ⅷ期よりもさらに明瞭に形成した時期であるといえる。

【Ⅹ期】第４群(平栫Ｂ類土器)

【ⅩⅠ期】

第５群(平栫Ｃ類土器)を基準にする時期である。土器は第１環状区域に集中して出土する傾向にある。第１環状区域と土器出土希薄域との境はさらに明瞭になり，土器出土希薄域や第１環状区域という場の機能が確立された時期といえる。しかしこの時期，埋納土器は１個体しか出土しておらず，Ⅷ期やⅨ期の時期と比べると対照的である。

このことは，単に土器埋納遺構の量的な問題ではなく，土器埋納遺構を伴う土器出土希薄域という場の機能に，質的変化が生じた可能性を指摘することができ，注目できる現象である。

一方，Ｒ－９・10区南側からＳ－９・10区にかけて，土器出土減少区が明瞭に確立する時期である。

さて，ここまで早期後葉前半期に属する土器の細別と型式ごとの出土状況・接合状況とを提示してきた。その上で土器埋納遺構などの遺構との関係を含めた，土器出土状況から見た上野原遺跡第10地点における当該時期の各期の様相を示してきた。

また，第２環状区域や第１環状区域などの土器出土集中区域は，土器の接合状況から「土器分置遺棄区域」である可能性が高いことが指摘できる。

その結果，「土器分置遺棄区域」の内側にあり，土器埋納遺構が各期にわたり検出され，かつ一般遺物の出土量が極端に少なかった，「土器出土希薄域」は，「祭祀」の場と位置づけることができる蓋然性が高いと考えられる。

上記の可能性が指摘できるならば，Ｒ－９・10区南側からＳ－９・10区にかけて拡がる，「土器出土減少区」は，「祭祀場」への導入路とも考えられる。いずれにしても，類似遺跡の発掘調査および報告が待たれる。

附　　篇

1．上野原遺跡出土の赤彩遺物について

鹿児島県立埋蔵文化財センター　　大久保浩二

上野原遺跡出土の赤彩遺物について

鹿児島県立埋蔵文化財センター　大久保浩二

1　はじめに

上野原遺跡３工区のアカホヤ火山灰下層からは，縄文時代早期後葉（約7500年前）の遺物が大量に出土している。中でも特筆すべき遺物として壷形土器や耳栓が挙げられるが，それらには華麗な文様に加えて，赤色顔料が塗彩されているものがある。本稿ではその赤色塗彩の状況について観察・分析し，顔料の種類の同定と若干の考察を行った。

縄文時代の赤色顔料には，ベンガラと水銀朱が考えられる。ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS）であり，粒子の形状に特徴がある。今回は主にＳＥＭとＥＤＳによるＸ線分析（成分分析）で検出される元素をもとに，赤色顔料の種類の同定を試みた。

2　分析

赤彩遺物については，まず肉眼および実体顕微鏡によってその塗彩状況や顔料の色調等を観察し，更に分析機器を用いて成分分析や顔料の粒子の形状について観察を行った。その結果をまとめて表１に示す。分析に使用した機器は，鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡（低真空ＳＥＭ・5300LV）とエネルギー分散型Ｘ線分析装置（ＥＤＳ・JED-2001）である。ＥＤＳによるＸ線分析は加速電圧20ｋＶ，有効時間100秒，取り出し角度20.2°，作動距離20.0㎜の統一した測定条件で行った。

3　赤彩土器について

赤彩土器は十数個体が出土しているが，今回はその内４点の資料について調査を行った。赤色顔料の種類は分析の結果，すべてベンガラであった。

資料１は，２個対になって埋納されていた完形の壷形土器の一体である（写真１）。平栫式の文様をもち，口縁部が方形を呈する。口唇部に羽状に施された沈線文と，その間に施された押し引き状の刺突文の中に，わずかに赤色顔料が残存している（写真２）。実体顕微鏡による観察でも，塗彩は沈線内だけにしか観察されない。暗赤色をした色調の具合から赤色顔料の種類はベンガラであると考えられ，ＥＤＳによる成分の分析でもＦｅのピークが検出された（図１）。Ｆｅのピークのほかに Ａｌ・Ｓｉのピークも検出されたが，これらは土壌等の汚染であると考えられる。ＳＥＭによる顔料粒子の観察も行ったが，特徴的な粒子は観察されなかった（写真12）。また対になっていたもう一体の壷形土器には，赤色塗彩は施されていない。

資料２は小型の壷形土器の口縁部である（図２－１）。外面の一部に赤色顔料が塗彩されている。ＳＥＭによる観察では，長さ５～10μｍ，太さ１μｍ程の細長い円筒形をした粒子が密集しているのが観察された。これらはベンガラの一種にみられる粒子でパイプ状粒子と呼ばれ，これを含むベンガラをパイプ状ベンガラと称している。

表１　上野原遺跡出土の赤彩遺物観察表

資料	写真	挿図番号	型 式	器 種	塗彩状況	ＳＥＭ像	ＥＤＳ分析	顔料種類
1	1,2	付図参照	平栫系	大型壷	口唇部沈線内	粒状	Ｆｅ	ベンガラ
2		図２－１	妙見系	小壷	口縁部外面	パイプ状	Ｆｅ	ベンガラ
3	3	図２－２	平栫系	深鉢	口縁部外面沈線内	パイプ状	Ｆｅ	ベンガラ
4	4	図２－３	妙見系	深鉢	胴部外面沈線内	パイプ状	Ｆｅ	ベンガラ
5	8	図２－４	平栫系	滑車形耳栓	沈線内	パイプ状	Ｆｅ	ベンガラ
6	10	図２－５	平栫系	滑車形耳栓	沈線内			
7		図２－６	平栫系	臼形耳栓	沈線内			
8		図２－７	平栫系	滑車形耳栓	器面全体？			

資料３は深鉢形土器の口縁部である（写真３）。口唇部から外面の沈線内に赤色顔料が塗彩されている。やや明るい赤色を呈し，ＥＤＳではＦｅの高いピークが検出された。ＳＥＭによる顔料粒子の観察では，明瞭なパイプ状粒子が観察された（写真13）。

資料４は深鉢形土器の胴部片（写真４）と考えられるものである。沈線の中だけを赤色顔料で塗彩している。分析の結果，パイプ状ベンガラが検出された。そしてこの土器の沈線内には，ベンガラを塗彩した時の工具の跡ではないかと考えられる筋が認められる。その観察から，ベンガラ塗彩工程の復元を試みたので，後述する。

４　耳栓について

耳栓は破片を含め土製品が19点，石製品が９点出土している。赤彩が認められるのは土製品のみ（６点）で，その内４点について調査を行った。

資料５は滑車形の耳栓である（写真８）。鋭い沈線でＳ字状の曲線文様などが描かれており，肉眼ではその沈線内にわずかに赤色顔料が認められる（写真９）。全面に塗彩されていたのが剥落したのではとみられたが，実体顕微鏡による観察でも沈線以外の器面には塗彩の痕跡は認められなかった。顔料の種類はパイプ状ベンガラであった（写真15）。

資料６は大型の滑車形耳栓である（写真10）。やはり沈線内のみに赤色顔料が認められる（写真11）。ベンガラであると考えられるが，Ｘ線分析は資料の制約があり行っていない。資料７の臼形耳栓（図２－６）についても同様である。

資料８は無文の滑車形耳栓（図２－７）である。肉眼では認めがたいが，実体顕微鏡による観察では器面の細かな凹みやヒビの部分に赤色顔料の付着が認められる。よって本来は器面全体が赤色塗彩されていた可能性が考えられる。

５　顔料塗彩の工具痕が残る土器について

赤彩土器の中には，赤色顔料を塗彩する工程・工具について検討できる資料があった。前出の資料４であるが，深鉢形土器の胴部片（写真４）の沈線内だけにパイプ状ベンガラが塗彩されている。器面には斜行する沈線や連点により文様が描かれているが，沈線には「赤彩のある沈線」と「赤彩のない沈線」がある。「赤彩のない沈線」は断面が半円形の滑らかな凹線（巾約２㎜）である。これは竹串状の棒状工具を横に引くことにより描かれていると考えられる。ところが「赤彩のある沈線」（巾約２～３㎜）には不規則で細かな筋が荒く残されており，「赤彩のない沈線」と痕跡を異にしている（実体顕微鏡写真５～７）。また滑らかな「赤彩のない沈線」の途中から，荒い筋のある「赤彩のある沈線」が始まっている部分（写真５）も観察される。これらのことからまず棒状工具で沈線文を描き，その後赤彩する沈線の部分だけをベンガラを含ませた絵筆のような工具でなぞったものと考えられる。荒く細かい筋が残ることから筆状に先が細かく分かれたやや硬い工具が想定され，筆に墨を含ませるように，ベンガラを含みやすくしたのではないだろうか。よって塗彩するベンガラも個体や粉体の状態ではなく，水のようなものに溶いた液体状になっていたと考えられる。また，工具の筋が残るということは器面がまだ完全に乾燥する前の柔らかい状態だったということであり，ベンガラは土器の焼成前に塗彩された（焼成前塗彩技法）ということを示している。

６　考察

資料に塗彩された赤色顔料はすべてベンガラであったが，その中でもパイプ状粒子を多く含むベンガラが大部分であった。このパイプ状ベンガラに関しては，近年の研究[1]により，崖端の湧水部や沼沢地などに棲息している鉄細菌の生産物（鉄の酸化物を沈積した鞘細胞）を焼成した結果得られるものであることが判明している。鉄細菌のうちパイプ状の鞘細胞を形成する種類はLeptothrixであり，この鉄細菌に由来するベンガラであると考えられる。南九州に於いては縄文時代草創期[2]・早期前葉からベンガラで塗彩された赤彩土器が出土しているが，これまでに調査したものはいずれもパイプ状ではなく，細かい粒子をしたものであった[3]。よって上野原遺跡の赤彩土器は，現在のところ南九州では最も古いパイプ状ベンガラの使用例のひとつと考えられる。関東方面では田戸上層式の段階でパイプ状ベンガラを施した赤彩土器が報告されており[4]，今後全国的な赤彩土器との比較・検討を行う必要がある。

また資料１のベンガラからパイプ状粒子を検出することができなかったことについては，別のベンガ

ラ素材を用いたことも考えられる。しかし調査が十分といえず，今後の課題としたい。

次にベンガラの塗彩状況の観察からは，土器・耳栓ともに器面全体を赤く塗彩するのではなく，文様として施された沈線の中だけを塗彩している傾向が認められた。またすべての文様を塗彩するのではなく，塗彩する文様を選んでいることも窺える。文様を更に浮き立たせるために，赤彩を施したのではないかと考えられる。このような沈線内の赤彩技法については，資料４の赤彩沈線に工具痕を認め，その塗彩工程を検討することができた。他の遺物については明確な痕跡が認められなかったものの，塗彩技法について，一つの手がかりが得られたことは意義深いものと考える。

また資料４の赤彩土器については，土器を焼成する前にベンガラを塗彩していることが判明したが，この土器焼成前の段階で，既に赤く発色したベンガラを塗彩したのであろうか。前述したようにパイプ状ベンガラは黄土色をした鉄細菌の鞘細胞（ベンガラ素材）を焼成することにより，赤く発色させたものである。よって土器焼成前であればこの黄土色をした未焼成のベンガラ素材を塗り，土器を焼くことで同時に焼成し赤く発色させたことも考えられる。このことはベンガラ製造にも関する問題であり，実験考古学的な手法も用いながら今後検討していきたい。他の赤彩遺物についても焼成前の塗彩であると考えられるが，剥落が多いものもあり判然としない。

次に耳栓について，全国的には縄文時代後期から晩期にかけて盛行する装身具であり，ベンガラや水銀朱で塗彩されているものが多い。それらと同様に赤彩された上野原遺跡の耳栓は，そのルーツとも考えられるものである。南九州に於いては縄文早期後葉の範疇で赤彩が施された耳栓が他にも出土しており，熊本県球磨郡深田村灰塚遺跡から滑車形の耳栓が２点出土している[5]。また鹿児島県福山町城ヶ尾遺跡からは同じく滑車形の耳栓（耳栓状土製品）が３点出土しており，内２点に赤彩が施されている[6]。顔料の種類はいずれもパイプ状ベンガラであった。

これらの壷形土器や耳栓に施された赤色塗彩の意味まで言及するにはとうてい及ばないが，祭祀性の高い遺物に限って赤彩が施されている点からは，その対象物に込めた縄文人の特別な思い（精神世界）を反映していると思われる。

以上不十分な調査であったが，縄文時代早期後葉の時期に，上野原遺跡に於いて行われていた赤色塗彩技術の一端を垣間見ることができた。今回の調査を足掛かりとして，今後も継続して調査・研究を行っていきたい。

最後に本稿の作成にあたり，成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所）の御教示を得た。記して感謝申し上げます。

註

1)岡田文男　1997　「パイプ状ベンガラ粒子の復元」日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨

2)宮崎県国富町塚原Ｃ遺跡　2000　新聞発表資料

3)鹿児島県立埋蔵文化財センター大久保浩二　2000「鹿児島県出土の赤色顔料－日本最古級の赤彩土器をはじめとして－」人類史研究第12号　人類史研究会

4)成瀬正和・領塚正浩　1998　「東日本における縄文早期中葉の赤色顔料関係資料」　日本文化財科学会第15回大会発表要旨

5)大久保浩二　2000　「灰塚遺跡出土の赤色顔料について」　『灰塚遺跡（Ｉ）』　熊本県文化財報告書第187集　熊本県教育委員会

6)鹿児島県立埋蔵文化財センター　「埋文だより第18号」

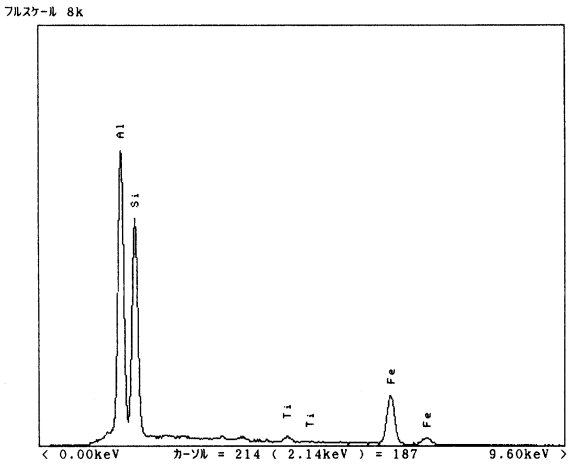


図１　資料１（大型壷）のＸ線スペクトル図

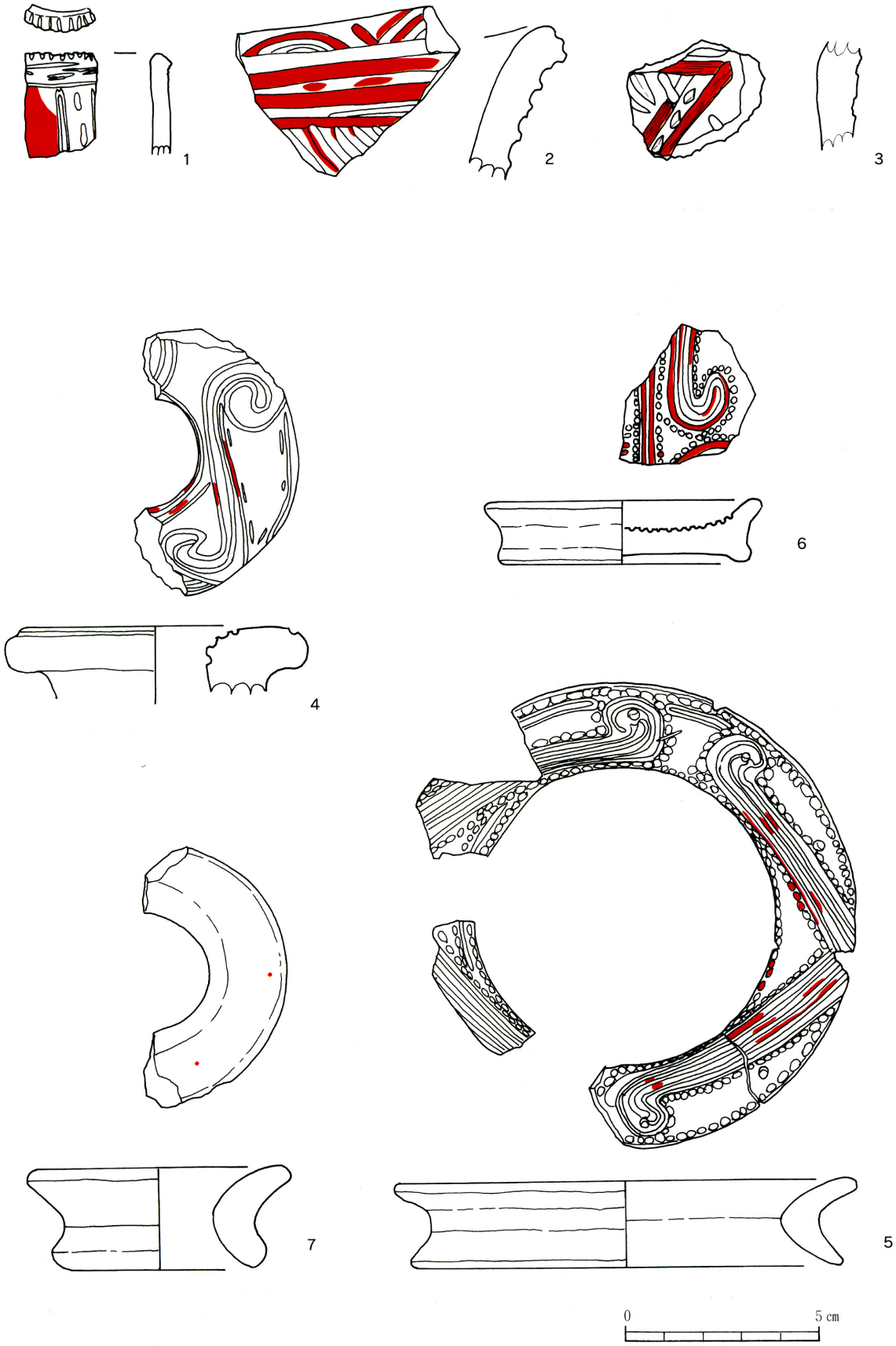


図２　上野原遺跡出土の赤彩遺物

写真１　大型壷(資料１)の口縁部

写真２　赤彩部分の拡大

写真３　深鉢(資料３)の赤彩

図版１　上野原遺跡の赤彩遺物(1)

写真４　顔料塗彩工具痕の残る土器(資料４)

写真５～７は沈線を拡大した
実体顕微鏡写真

写真５　「赤彩のない沈線」に重なる
「赤彩のある沈線」

写真６　写真５を別角度から撮影

写真７　右側「赤彩のない沈線」
左側「赤彩のある沈線」

図版２　上野原遺跡の赤彩遺物(2)

写真８　耳栓（資料５）

写真９　写真８の赤彩部分拡大

写真10　耳栓（資料６）

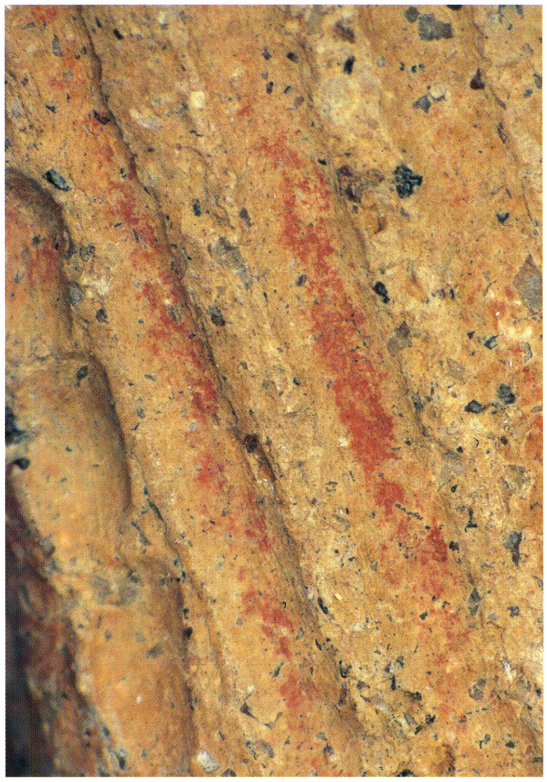


写真11　写真10の赤彩部分拡大

図版3　上野原遺跡の赤彩遺物(3)

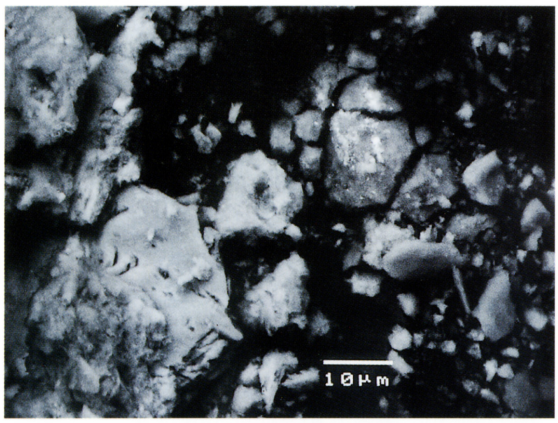


写真12　資料１（大型壷）のＳＥＭ像

写真13　資料３（深鉢）のＳＥＭ像
パイプ状粒子の拡大

写真14　資料4（深鉢）のＳＥＭ像

写真15　資料5（耳栓）のＳＥＭ像

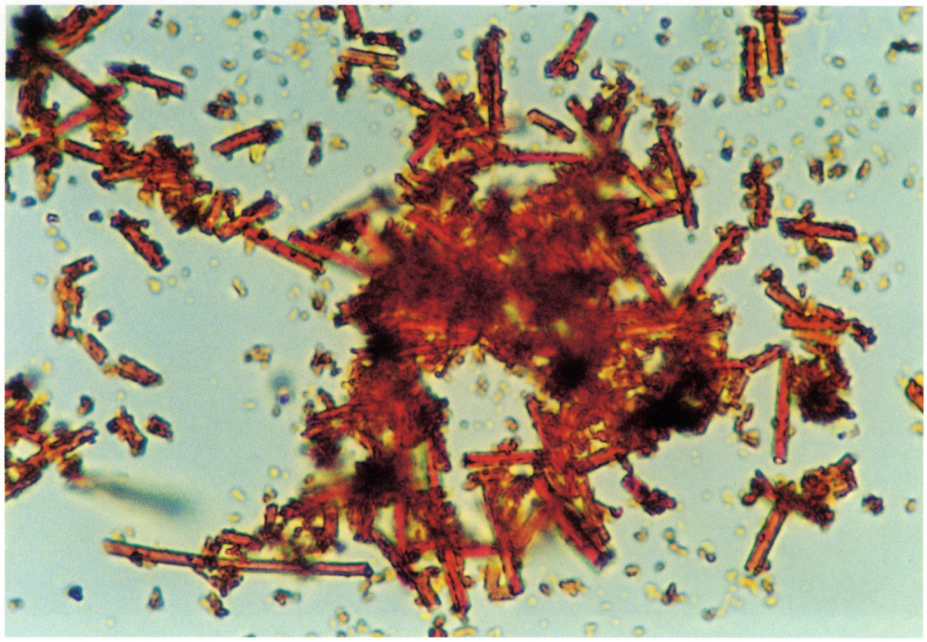
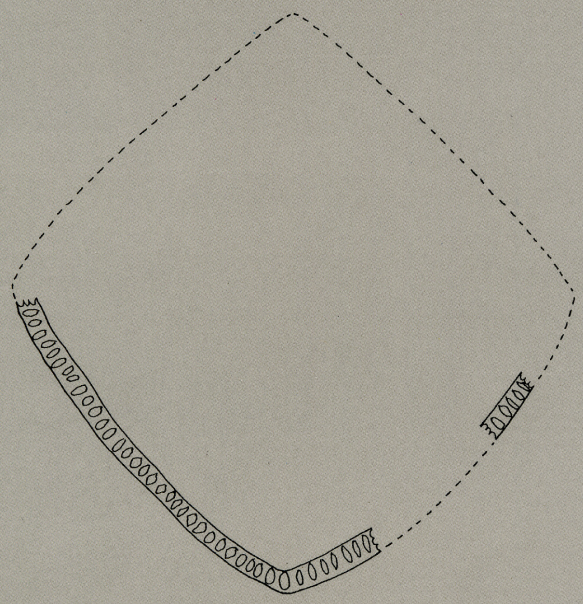
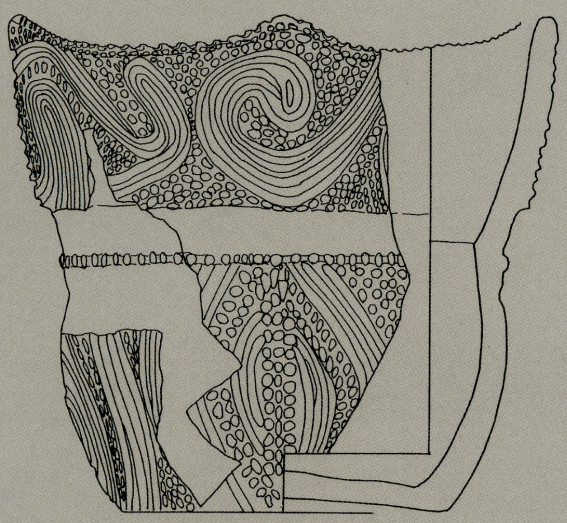


写真16　透過型顕微鏡によるパイプ状ベンガラ（参考資料）

図版４　ベンガラの顕微鏡写真

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）

国分上野原テクノパーク第３工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（II）

上野原遺跡（第10地点）（第５分冊）

発行日　平成13年３月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
☎（0995）６５－８７８７
印刷所　濱島印刷株式会社
〒890-0052　鹿児島市上之園町17-2
☎(代)（099）２５５－６１２１